

## 2008アンデスの記憶 ワンドイ縦走からの敗退

上田 幸雄 (チーム・ブランカ)

「戻ろう・・・」

僕たちは、もう1時間以上も同じ場所で思案し続けていた。

ワンドイ・スール(南峰)の頂に立っても喜びは込み上げてはこなかった。後立山の頂に立った時のように・・・

ここが出発地点なのだ。スールの頂では360°の展望を欲しいままにしていたが、30分も下降しない間にガスに巻かれてしまった。これから下降すべきラインは遥か奈落の底へ落ちているかのように見える。これがラインなら僕たちは無事下降することが出来るのだろうか。平坦な雪のスロープはアンデス襲をまとった雪壁となり、とても歩いて下れる傾斜ではない。クライムダウンも然り。北面の雪壁は日中の強烈な日射を浴びて緩みきっている。地図を見る限り、今立っている場所からはどう見積もっても200mはあるだろう。懸垂下降するとしても4回分の強固なアンカーが必要となる。そして、その先には垂直のクレバスが口を広げているはずだ。

昨年、ワンドイ・ノルテ(北峰・ワンドイ4座の最高峰)に単独登頂した友人にノルテの頂上から撮った写真を見せてもらっていたのだが、こんな所に思ってもいない困難が待ち構えていた。スールの下降で問題となるのはくっきりと写っている巨大クレバスだけだと思っていただけに、予想外の雪壁に戸惑い、自分達の見積もりの甘さを悔やみ、この先の行程にも不安を感じ始めていた。

6月9日

先発の花谷が出国。ワラスに到着後、情報収集。ガイド登山以外の登山者に対して規制が厳しくなったとの情報があり、現地エージェントに相談。その結果、花谷のガイド証で登山許可の書類を国立公園事務所で作成し、登山ができるようになった。(花谷以外は花谷の顧客であるという位置づけとなった)しかし、現実にはガイドなしで登山しているクライマーはたくさん存在すること、その書類があっても実際はチェックポストで書類に不備があると指摘されたことを考えると、必ずしもこのルールが適応されていないと思われる。今後この山域を登山する人は、最新の情報を集めたほうがよい。

6月19日

上田がワラスに到着。翌日より順応活動に入る。ワラス郊外の十字架の丘(3,000m~3,600m)、ウィルカワイン遺跡からのトレッキング(3,600m~4,500m)で順応を行う。

6月25日~28日

ピスコ(5,752m)にて順応登山と偵察。ワンドイのすぐ隣にあるこの山は、順応と偵察には最適。初日3,900mで泊、2日目4,600mのBC泊、3日目アタック、4日目下山。4日間かけて登ったが、もう1泊して登ったほうが順応登山としては良かったと思う。その一方、コックを雇ったので、登山そのものは非常に快適であった。また天候に恵まれ、しっかりと偵察することができた。偵察の結果、ワンドイ・スール北東壁は雪の状態

が未知数の壁であること、ノルテからエステ（東峰）への下降ルートが、昨年の写真よりも黒く状態がかなり悪そうであることが確認できた。ルートをスール南西バットレス～オエステ～ノルテ～エステに繋げるラインが一番可能性のあるラインと判断。

7月2日～4日

ワスカラン（6,768m）にて高所順応。今回はC1（5,300m）での宿泊とワンドイでの最高標高である6,300m以上での行動が目的。それに加えて、本番と同じ装備・食料で最終調整を行う。また、順応登山でのダメージを少なくするため、必ずしも登頂を目的としないことで登山した。初日にBC（4,300m）、2日目にC1（5,300m）で宿泊。若干高所の影響を感じるものの、2人とも問題なく睡眠できた。3日目はトレースのないワスカラン北峰に登るが、6,300m地点でラッセルが深くなり、疲労を残し過ぎないためにもここで引き返すこととした。この時点で、ラッセルしながらでも1時間に300mは標高を稼げるまでに動けるようになった。

ワスカランでは水分摂取のタイミングなど、生活面での改善ができた。少ない食料でいかに効率よく必要なものを摂取するか。何でも持っていけない状況では、一つ一つが重要になる。

ワラスに戻ってから、しばらくストライキで町から出られないことが判明。そのため5日間のレストが入った。ピスコ、ワスカランとも、もう少し順応に時間を掛けたほうが良かったと思うが、日程の関係であれがベストではなかったかと思う。結果として順応はうまくできていたように思う。実際ワンドイ・スール頂上でも高所障害は感じられなかった。

ワンドイ・ノルテからの下降路に不安があった

ことを考えると、ノルテからの退路を確保しておくことができればアタック時に突っ込む後ろ盾になったかもしれない。しかし、多少なりともオンサイトでの縦走にこだわりがあったことも事実であった。

7月10日

出発の朝を迎えた。外はまだ薄暗いが、時間が早いせいではない。雲が多いのだ。うろこ雲が空一面を覆っている。やがて雲は黄金色に染まり、ワラスの街にいつものクラクションが戻ってきた。ホテルの窓からいつも見えていたワンドイは雲の中に隠れてしまい、ワスカランの頂も雲に押しつぶされようとしていた。

先日の偵察時に確認していたヤングヌコ湖のモニュメントで下車。あたりをつけていた尾根は踏み跡が残っており途中には小屋の跡も残っていた。踏み跡はしっかりしているので、最近もこの周辺で登山活動が行われているように見受けられた。モレーンに入るとさすがに踏み跡ははっきりしないが所々にケルンが積まれ、氷河末端近くにはテント跡地が現れる。ここを拡張して今宵の寝床とする。

頂上付近は日中雲に覆われていたが、夕方になると雲が切れ始め、明日の好天を期待させてくれた。

7月11日

今日の目標は5,850mの肩。スムーズに登ることができればスールを越えることが出来るかもしれないなんて甘い考えを持っていた。

朝一で不安定なガレ場を歩かなくてはならないので薄明るくなってから出発する。巨大な岩がゴロゴロしたガレ場を縫うように登り雪線に到達。ここから完全装備で高みを目指す次第に傾斜は増し、コンティニアスからスタッカットに切り替

### 3. 海外登山記録

える。壁の上部はガスに巻かれて偵察のときに考えていたラインが判然としないが、右上に見えている懸垂氷河と目の前の岩壁の間を登ることは間違いないので、真ん中の氷壁にロープを伸ばす。下部は快適な氷壁だが登るにつれて雪質は不安定になり、プロテクションを岩壁に求め雪壁とのコンタクトラインを登って行く。途中、残置のピトンや捨て縄が目に入る。見たところさほど昔の物ではない。やはり今でも登られているようである。やがて肩から伸びるリッジの直前で踏んでも踏んでも固まらないザクザクの霜ザラメ雪となる。花谷が腰ラッセルでロープを伸ばすがあまりに状態が悪いので、敗退の文字も頭にちらつき始める。ダメ元で上田がラインを変えてアタックする。「確かに悪い」が、ここでの敗退はあまりにも情けない。必死で目の前の雪を掻き分け掘り返すと氷の層が現れ、活路が見えてきた。プロテクションが取れば後は時間をかけて塹壕掘りをすれば良いのだ。このピッチは黒部での塹壕掘りを彷彿とさせてくれた。とにかく目の前に見えている雪のリッジに辿り着けば後は何とかかなりそうだ。

簡単そうに見えたリッジも雪の状態が悪く、一筋縄ではいかない。特に肩に抜ける最終ピッチはプロテクションの取れない塹壕掘りを強いられたが、花谷が気合いで突破した。あたりはもう真っ暗になったが肩からもう1ピッチ伸ばすと快適な幕営地を得ることが出来た。

7月12日

快晴の朝を迎えるが、あまりに寒いので太陽が昇るのを待って歩き始める。目の前に見えるオエステ（西峰）が素敵だ。

ラッセルはなく固く締まった雪面を登っていくと、クレバスに阻まれる。最狭部を渡りさらに登り続けるがまたもやクレバスに阻まれてしまった

ようだ。どうもこのまま登り続けても頂上には達しないようだ判断し戻って別のラインから登ることにする。1時間以上のロス。正規のラインは登るにつれて傾斜を落とし頂上直下の広い台地に辿り着く。スールの頂上は台地の先にちょこんと尖った雪のピークだった。雲は多いが周りの山、特にこれから向かうオエステ・ノルテ・エステはよく見えている。頂上は狭いので台地まで下りこれからのルートをよく見ておくことにして大休止。

しかし、下り始めるとあっという間にガスに巻かれてしまった。目の前の雪面は急激に落ち込みアンデス巒を形成している。ロープで確保されたまま右へ行ったり左へ戻ったりして下降路を探すが、ガスの切れ間に覗く雪壁はここからの下降を躊躇させるに十分だった。もう1時間以上も下降路を求めてうろろうしているが視界は一向に回復しない。ルートを確保しないまま懸垂下降を行うのは退路を断たれるリスクを背負うことになる。

昨日、今日と僕たちの想定外の状況に今後の行程を無事越えることが出来るのか不安が渦巻いていたのだ。天候が安定していないことも大きな不安要素だった。往路を下山ルートとする登山とは違い、縦走登山となると途中のエスケープルートや突っ込むか戻るかのターニングポイントでの判断が生死を分けかねない。結局、一步踏み出す勇氣は不安に押しつぶされ見えなく敗退の決断をするに至った。一步踏み出してしまえばなるようになるだろう。しかし、万が一は許されない。そう思っていた。

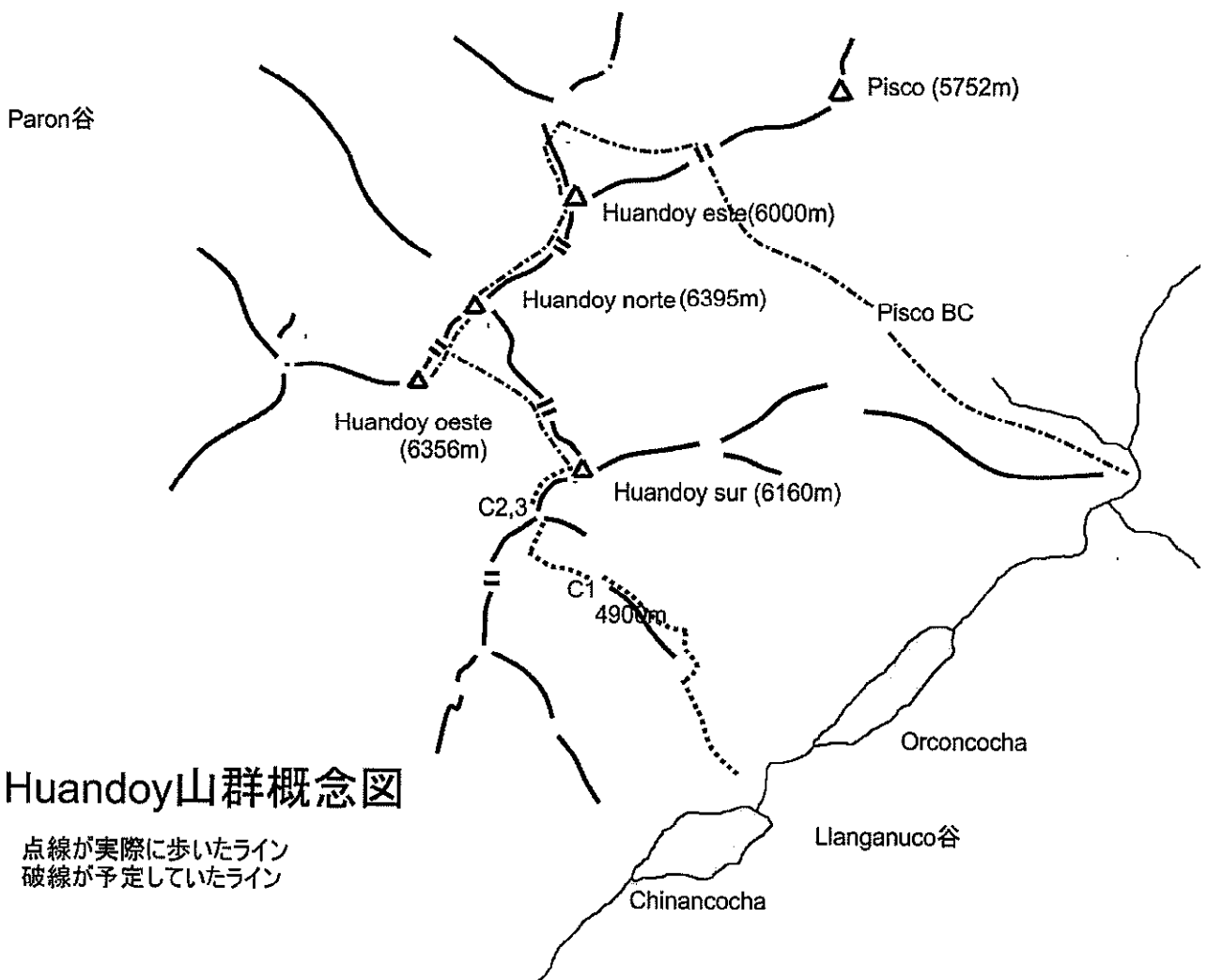
お互いの思いは一緒だった。「きもち」で負けていた。

ここまで辿ってきたトレースを辿り帰路につくが振り返らずにはいられない。

振り返るたびに、もう一步踏み出したいという気持ちがあふれてくるのだが、一方でこれが間違っていない判断なのだという思いが交錯し気持の整理がつかない。後ろ髪ひかれる思いで今朝のキャンプ地に到着してしまった。

天候は怪しくなり始めていたが明日の下降に備えて最初の懸垂支点を設置に向かう。ロープで確保された状態のまま下降点でアンカーを埋めるための穴を掘る。最初の1mほどは大粒の霜ざらめ雪の層で土嚢袋はアンカーとして使えない。さら

に掘り進めたところで雪が固くなり始めスノーピケットを差し込む。何とか体重を支えるには支障なさそうである。念のため、もう一本差し込み荷重分散したアンカーを作成して明日に備える。遠くで雷鳴が聞こえる。今回で4回目のアンデス遠征の経験を持つ花谷だが、雷鳴を聞くのは初めてだと言う。テントに戻って落ち着くと霰が舞い、次第に雷鳴が近づいてくる。やはり敗退して正解だったと二人で顔を見合わせた。



7月13日

何故？ 快晴とはいかないが絶好の下山日和。

後ろ髪を引かれながら懸垂下降を始める。1ピッチ目の支点は懸垂下降に耐えることのできる代物になってくれたようだ。リッジ上は右にトラバースしながら下っていくので振られ止めを設置しながらの懸垂となる。2ピッチ目以降はアバラコフやロックピトンが使えるようになり安心できる支点を構築できた。

7ピッチの懸垂下降を終え、残り300mはクライムダウンで慎重に下降して、無事2本足で歩ける氷河に降り立つ。その日のうちにワラスへ戻り、僕たちの登山が終わった。

不安定になってきた天候、ノルテからの下降路の不安、退路を断たれる不安、帰国日が迫った日程、そしてアラスカでの遭難。これらの不安な要素を吹き飛ばすだけの不屈の闘志が足りなかった。また国内での登山がワンドイに繋がっていなかったともいえる。ラジオから流れる気象情報、過去の記録や偵察から推し量る事の出来るライン、安易なエスケープ、十分な食料・燃料を持ち込み悪天候に耐えることのできる日程などリスクを最小限に抑え、冒険的要素の少ない登山ばかりしていた。

しかし、最終下山日を過ぎても下山できなかつたり、下山後の生活や登山に支障をきたすようでは成功した登山とは言えないだろう。ただ、負け惜しみや言い訳にしか過ぎないのだが・・・

花谷・上田 記